社会資本整備審議会河川分科会
河川整備基本方針検討小委員会（第136回）

令和6年4月19日

出席者(敬称略)

委員長 小池 俊雄
委員 大井川 和彦
委員 大野 元裕
委員 熊谷 俊人
委員 小池 百合子
委員 里深 好文
委員 清水 義彦
委員 高村 典子
委員 戸田 祐嗣
委員 中北 英一
委員 中村 公人
委員 中村 太士
委員 福田 富一
委員 森 誠一
委員 山本 一太

発言者	内容
【事務局】	それでは、定刻となりましたので、社会資本整備審議会河川分科会「第136回河川整備基本方針検討小委員会」を開催いたします。本日の進行を務めさせていただきます河川計画課長の森本でございます。よろしく願いいたします。会議でございますが、公開にて行います。報道関係者及び一般の方には、この会議の様子を別回線のウェブ上で傍聴いただいております。本日の欠席の委員でございますが、秋田委員と立川委員につきましては、御都合により欠席でございます。清水委員につきましては、御都合により遅れて御参加いただくことになっております。以上、17名中15名の委員に出席いただいておりますので、社会資本整備審議会の規則に基づきまして、求められる委員の総数以上の出席がございますので、本小委員会が成立しておりますことを御報告いたします。また、国土交通省より、水管理・国土保全局長、総務課長をはじめとする関係課室長が出席しております。それでは、冒頭、廣瀬水管理・国土保全局長より挨拶を申し上げます。

発言者	内容
【廣瀬局長】	<p>皆さん、こんにちは。小池委員長をはじめ委員の皆様におかれましては、新年度になりまして、またお忙しいところ、御参加いただきましてありがとうございます。利根川水系は今日で4回目の御審議をいただくということでございます。ステップ・バイ・ステップということで、大きな川でもございますし、関係者も多いということで、丁寧な議論をしていただいているのではないかと思います。感謝申し上げます。今日も利根川水系単独で、河川環境と河川利用等を加えて、本文まで御提示をさせていただきたいと思っております。河川環境につきましては、中村太士先生にお世話になってございまして、「生物の生息・生育・繁殖の場としてもふさわしい河川整備及び流域全体としての生態系ネットワークのあり方検討会」を、この2月から開催させていただいてございまして、その大きなテーマは、河川整備基本方針や河川整備計画に河川環境の目標をどのように位置づけるかという議論を、今ちょうどしていただいているところでございます。最終的な取りまとめをさせていただいているような状況になっているかと思いますけれども、そこで御議論いただいているような内容もしっかり意識をしながら、今日の資料に入れておりますので、忌憚のない御意見を頂戴できればと思います。また、関係都県の皆様も御出席いただきまして、ありがとうございます。どうぞ引き続きよろしく願いしたいと思います。本日もぜひよろしくお願い致します。</p>
【事務局】	<p>ありがとうございました。続きまして、小池委員長、御挨拶よろしく願いいたします。</p>
【小池委員長】	<p>取りまとめを仰せつかっております小池でございます。今、局長からお話がありましたように、4回目となります。振り返ってみますと、1回目は利根川治水の変遷と現状というものを皆さんで共有させていただきました。2回目は気候の変化を考慮して計画降雨を1.1倍して、基本高水を算出いたしました。それをもとに3回目、前回ですけれども、基準地点の計画高水流量、河道でどれだけ流し、そして貯留でどれだけ持たせるかという配分を議論させていただきました。加えて、首都圏への被害をどう考えるかについて検討いたしました。特に私どもが今回使っております1.1倍というのは、増加倍率の推定の平均値でありまして、それを超えるもの、つまり1.3倍というものも推定されておりますし、現実にも起こっています。そういう計画を超えるものが来たときに、首都圏を中心とする地域の被害をいかに抑えられるか、あるいはそこから復旧・復興をいかに早くできるかということ踏まえた計画が必要という議論もさせていただきました。今日は環境、河川利用、土砂、それから流域治水の推進という項</p>

発言者	内容
	<p>目を踏まえて、いよいよ本文案の議論となります。その議論を始める前に、少し違う観点のお話をさせていただければと思います。利根川という川を考えると一つの重要な視点というのは、水の利用ではないかと思います。私自身がこういう水関係の研究、仕事をさせていただききっかけは、私が大学3年生のときに、私の故郷・福岡が日本の戦後の最大と言われる渇水に見舞われたことです。昭和53年、1978年のことですが、これが縁でこういう河川の研究を始めるきっかけになったわけですが、その昭和53年の前年、昭和52年5月に、今も続いております水の週間・水の日というものが閣議決定されております。そのときの文章を見ますと、当時、高度経済成長真っただ中であつたわけですが、水資源の有限性、水の貴重さなどについて国民の関心を高め、理解を深めるために水の日を設定するというふうに記されています。その翌年、先ほど申しました福岡渇水が起こって、その重要性というのは国会等でも随分議論されたという記録が残っております。時を経て平成26年、2014年には、その表現が人間社会の営みと自然環境の保全に果たす水の機能が適切にバランスしている状態、これを健全な水循環というふうに定義されまして、この健全な水循環の維持と回復を目的としまして、水循環基本法が成立しております。現在の水の日は、この水循環基本法の中で設定されているものでございます。これは不思議なもので、1977年、昭和52年に水の日が設定されたのは5月なんです。その年にアルゼンチンのマルデルプラタで第1回国連水会議が開かれておまして、昨年、第2回目がニューヨークで開かれました。こういう水の問題に関する世界中の関心が、ある意味で変容しつつも、また高まっているということの証左ではないかと思います。年が明けた昨年の記録を見ますと、年平均気温は地球全体で14.98度、これは産業革命のときよりも1.489と高いそうで、世界がこれまでも最も暑い1年であつたと記録されておりました。日本は1898年から15か所で気温観測がずっと続けられておられますが、6月から8月の気温はその平均値の1.76度高い。これも最高気温、最も暑い6月から8月であつたということが、気象庁から報告されています。これも私事で恐縮なんです。2007年にIPCCの第4次評価報告が発表され、私自身はその第1作業部会、サイエンスをまとめる作業部会のレビューエディターをさせていただきました。そのときにまとめた言葉が、気候システムの温暖化には疑う余地がない。unequivocal という英語をどういう日本語にするか、随分皆さんで協議したことを記憶しておりますが、それが2007年で、この年、IPCCはノーベル平和賞をいただきましたが、でも社会が変わるには時間がかかるんです。いろん</p>

発言者	内容
	<p>な施策が提案され、いろんなことが議論されましたが、実際には2015年1月に我が国では人の命を守るという新たなステージという政策が動き始めまして、そこから水防法改正等がありまして、洪水の激甚化、頻発化に対応するような社会づくりが必要となりました。その延長線上で、今、私どもが議論している流域治水という答申が、これは世界に先駆けてと言ってよいと思いますが、2020年に社会資本整備審議会から答申させていただいて、21年に法整備がなされて、今、私たちはそれに則って基本方針の変更をしているということでございます。2023年、昨年は国土審議会水資源開発分科会から、「リスク管理型の水資源政策の深化・加速化」という提言が出ております。水資源政策がこういうふうには先ほど言いました水の日制定のときから変容しつつも、非常に重要な局面、リスク管理型というものを出したことに、私自身は大変深い見識のもとにこれが出されているなということを痛感しております。そうしておりましたら、お隣にいらっしゃいます局長から2週間ほど前に、私どもが進めております流域治水から、流域における総合的な水管理に進化するという政策を考えなければいけないというメッセージをいただきまして、非常に心強いいたしました。何を申し上げたいかといいますと、もう冒頭に申し上げたとおりですが、私どもは流域治水ということで利根川をずっと考えてきておりますが、一方で、平時の水使いというのが利根川にとって大変重要であります。農業にとっても、それから都市用水にとっても、工業用水にとっても非常に重要でございます。平時と洪水時、あるいは平時と渇水時、こういうものを統合的に捉えることによって、私たちが目指す流域治水というものの本当の姿が見えてくるんじゃないかと思っております。今日は洪水が中心の中で、環境であるとか、河川利用であるとか、水の利用も含めて議論があります。どうぞそういう視点も踏まえながら、皆様の忌憚のない御意見をいただければと思っております。</p>
【事務局】	<p>ありがとうございました。それでは、議事に入らせていただきます。以降の進行につきましては、小池委員長、よろしくお願いいたします。</p>
【小池委員長】	<p>それでは、本日の議事でございますが、審議水系は1つ、利根川でございますので、まずこれに関わる資料を事務局から御説明いただきまして、議論したいと思います。事務局から、資料1、2、3の説明をお願いいたします。</p>
【事務局】	<p>事務局の河川計画調整室長の小澤です。まず、資料1の利根川水系河川整備基本方針の変更について御説明いたします。1ページを御覧ください。これまでの審議の流れをお示ししております。利根川につ</p>

発言者	内容
	<p>いては、12月、1月、3月に開催した小委員会で、④超過洪水・流域における治水対策までを御審議いただきました。本日は、前回までの委員会での意見に対する補足説明と、⑤河川環境・河川利用についての検討、⑥総合土砂管理、⑦流域治水の推進、それから河川整備基本方針本文について御説明させていただき、御審議をいただきたいと考えております。なお、資料1の①から④の部分については、本日の議論に関係する主な内容と、補足説明の箇所を掲載した抜粋版としております。</p> <p>3ページを御覧ください。流域の概要について、前回までに委員からいただいた御意見です。全て前回までに回答させていただいておりますので、4ページ以降、前回までの資料から土地利用状況、近年の降雨、動植物の生息・生育・繁殖環境、水質、河川利用、渇水の発生状況に関する資料を掲載してございます。</p> <p>次に、18ページを御覧ください。基本高水のピーク流量について、前回までに委員からいただいた主な御意見です。赤字で記載しております中北委員からの御意見を踏まえた検討について、前回までにお答えできておりませんでしたので、御説明させていただきます。23ページを御覧ください。中北委員からは、気候変動下での危機管理対応を念頭に、カスリーン台風や令和元年東日本台風の擬似温暖化の検討について御意見をいただきました。環境省のほうで令和元年東日本台風について擬似温暖化実験を実施しており、2度上昇時の実験結果の降雨量を入力して、八斗島地点の流量の変化を算定いたしました。左上の表を御覧ください。最大流量は、実績雨量による計算結果の1万8,500 m³/sに対して、疑似温暖化後は、それぞれのモデルの最大値は1万9,600 m³/sから2万2,600 m³/sとなり、実績降雨量に基づく流量の1.1倍から1.2倍程度の流量となりました。なお、カスリーン台風の疑似温暖化実験の結果は、降雨データが40kmメッシュの結果しかなく、メッシュサイズが大きかったため、今回、流量の算定は実施してございません。このほか19ページから22ページには、前回の基本高水のピーク流量の設定の資料から、本川、渡良瀬川、鬼怒川、小貝川における基本高水の検討結果を掲載してございます。</p> <p>続きまして、25ページを御覧ください。計画高水流量について、前回までに委員からいただいた主な御意見です。赤字で記載しております中村公人委員からの御意見を踏まえた検討について、御説明をさせていただきます。55ページを御覧ください。中村公人委員からは、真ん中のグラフでございませけれども、流域の取組を示す緑の部分の矢印の高さについて御意見をいただきました。前回資料では、昭和6</p>

発言者	内容
	<p>1年8月洪水の1,750 m³/sの高さと一致しているかのような記述となっていましたけれども、それ以上の規模の事象も含め、様々な洪水に対応するための取組が必要であることが分かるように、今回修正いたしました。このほか26ページから54ページまでは、前回までの計画高水流量の検討資料から、利根川治水対策の経緯、基本方針変更の基本的な考え方についての検討結果概要、利根川本川、渡良瀬川、鬼怒川、小貝川それぞれについての河道配分流量の考え方、洪水調節の考え方、現行方針と変更案の比較の資料を掲載してごさいます。</p> <p>続きまして、58ページを御覧ください。超過洪水対策・流域における治水対策について、前回までに委員からいただいた主な御意見です。全て前回までに回答させていただいておりますので、50ページ以降、前回までの資料から、利根川流域の氾濫リスク、堤防強化策、田んぼダムなどの流域対策、警戒避難体制の強化策などの取組について掲載してごさいます。</p> <p>続きまして、河川環境・河川利用について御説明をさせていただきます。66ページを御覧ください。河川環境・河川利用について、前回までに委員からいただいた主な御意見です。上の方から、1つは治水と環境を両立する河川の掘削方法、それから鬼怒川の礫河原の維持、河川環境に効果のあるダム群の連携、ダムの容量振替に当たっての河川環境への配慮、遊水地の管理を通じた生態系ネットワークの創出、霞ヶ浦、渡良瀬遊水地等の水質改善、気候変動に伴う雪の変化による河川環境への影響といった観点から御意見をいただきました。このような御意見を踏まえて、河川環境・河川利用の検討を行いました。</p> <p>67ページを御覧ください。河川環境・利用の具体の議論に入る前に、流域の成り立ちについて御説明いたします。左上にありますように、約5,000年前頃までは現在の利根川の大部分は海であり、左下の図にありますように、約1,000年前頃までに海面が低下し、利根川は東京湾に流入しています。現在は、右下の図のように江戸時代以降の東遷により、利根川は銚子で海に流れております。また、利根川の水系の上流部には、日光白根山、赤城山、榛名山、浅間山等の火山が存在しています。このため、利根川流域の地質や環境は、火山噴火に伴う噴出物の影響や海の影響も大きく受けられていると考えられます。日光白根山、赤城山、榛名山、浅間山等の火山地は、主に第四紀火山岩類からなり、榛名山、浅間山の北麓には沖積層も分布し、裾野の表層には厚い関東ローム層が堆積しています。北部の帝釈山地、三国山地、足尾山地、関東山地北部の丘陵地には、主に砂岩、粘板岩、</p>

発言者	内容
	<p>石灰岩等の固結堆積物で構成されています。平地部の沖積平野には、水田に適した泥炭や黒泥土が見られます。</p> <p>次に、68ページを御覧ください。動植物の生息・生育・繁殖環境について、基礎データを整理してございます。左上のグラフにございます魚類、鳥類の数は、経年的には大きな変化は見られず、ほぼ横ばいの傾向でございます。左下のグラフにある植物群落は、平成28年以降、人工草地が減少し、一年生草本群落が増加していますけれど、これは平成28年までは堤防の部分を一律に人工草地とカウントしていたものを、カウントの仕方を変えたことによるものでございます。右側の年平均気温、年平均水温は、若干の上昇傾向が見られます。次に、69ページを御覧ください。本川の区間別、支川別に、河川環境管理シートの情報などを踏まえて、生物の生息場の分布状況を現状分析し、河川環境の目標を設定しております。70ページを御覧ください。こちらは本川上流部の区間の目標の設定事例です。上流部は蛇行河川が形成され、礫河床の瀬・淵にはアユ、ウグイ等が、ワンド・たまりにはムサシノジュズカケハゼ等の魚類が生息し、礫河原にはカワラサイコ等の植物が生息、カワラバッタ等の陸上昆虫類が生息しています。また、中州等にはコアジサシ、チドリ等の鳥類が生息し、水辺にはカモ類等の鳥類が生息してございます。このため、連続した瀬と淵、ワンド・たまり、礫河原の保全・創出を図ることを目標としてございます。71ページ、72ページをお願いします。71ページ、72ページのほうに、本川の各区間、それから支川ごとに行った現状評価と目標の設定の一覧をお示ししています。数が非常に多くて一覧表だと理解しにくいので、73ページを御覧いただければと思います。73ページに、目標の部分を地図に旗揚げする形でお示しをいたしております。本川の目標を右側のオレンジの枠中にお示ししており、支川と霞ヶ浦の目標を左側、あと上部の水色の枠の中にお示ししてございます。例えば左上の渡良瀬遊水地では、ヨシ原の保全・創出、その右の鬼怒川では礫河原の保全・創出、一番右の霞ヶ浦ではヨシ原の湖岸植生帯の保全・創出などを目標として設定してございます。これらの目標に基づいてモニタリングを実施しながら、継続的に取り組んでいきたいと考えております。これら河川環境の目標の在り方については、先ほどお話が出ましたけれども、生物の生息・生育・繁殖の場としてもふさわしい河川整備及び流域全体としての生態系ネットワークのあり方検討会で御議論いただいておりますので、そういった結果も踏まえて、さらによりよいものとなるように見直しを進めていく予定としてございます。</p>

発言者	内容
	<p>次に、74ページを御覧ください。中村太士委員からは、治水と環境を両立した掘削の工夫について御意見がありました。河道掘削においては、多様な生物が生息・生育・繁殖する水際環境を保全・創出することを基本方針としています。左側の図にお示ししましたように、同一河川内の良好な河川環境を有する区間の河道断面を参考に、掘削方法を検討してございます。また、X掘削、船底型掘削など、いろいろな掘削の技術事例がございまして、そういったことも踏まえてさらに検討を進めて、治水機能の強化と良好な環境の創出を両立していきたいと考えてございます。75ページを御覧ください。今回の基本方針の変更によって河道配分流量が増える利根川上流部、烏川、神流川の検討事例を掲載しています。先ほど御説明した考え方のもと、現時点で想定される断面を区間ごとにイメージして整理しております。砂州の切下げにより攪乱頻度を増加させ、自然の営力により礫河原を保全・創出することや、平水位に限らず生態系に応じた掘削の深さや形状の工夫によるワンド・たまりの保全・創出を図ってまいります。</p> <p>次に、76ページを御覧ください。中村太士委員からは、鬼怒川での礫河原の保全・創出について御意見がございました。鬼怒川においては平成16年度に「鬼怒川河道再生検討委員会」を設置し、検討を進め、砂州の切下げによる攪乱頻度の増加などに取り組むとともに、鬼怒川の外来種対策を考える懇談会との連携により、外来種除去等の活動を実施しています。こういった体制も活用しつつ、礫河原再生の取組を継続的に実施してまいります。</p> <p>次に、77ページを御覧ください。森委員からは、河川環境に効果のあるダム群の連携について御意見をいただきました。奥利根上流のダムは降雪量が多い、平時に貯水しやすいという特徴があり、下流側のダムは流域が広く、洪水時に様々な降雨パターンに対応しやすいという特徴がありますので、こういった特徴を捉えて、治水機能、利水の機能の向上だけでなく、環境に資するような活用の検討も進めてまいります。78ページを御覧ください。河川環境に資する具体的なダムの運用について御説明いたします。右上にございますように、鬼怒川においては、川治ダム、五十里ダムにおいて、ダム群連携施設として2つのダムをトンネルでつないで、有効に水を運用できるようにしてございます。五十里ダムは規模が小さく、容量が少ないため、雪解けの季節や台風のときなどはダムに水をため切れない一方、川治ダムは容量は大きいですが、なかなか水量は回復しないといった特徴がございまして。五十里ダムで貯留できない場合は、トンネルを使って川治ダムに水を貯留します。また、雨が少なくなるときは、川治ダムに貯留した水をトンネルを使って五十里ダムに流し、五十里ダムの水量を補</p>

発言者	内容
	<p>給して、下流の河川の水を補給し、河川環境の改善を図ってごさいます。また、右下の図にありますように、ダムの洪水調節容量や発電容量に一時的に水を貯留して、ダム下流の環境改善のためにフラッシュ放流を行う取組を実施してごさいます。</p> <p>次に、79ページを御覧ください。森委員、中村太士委員からは、ダムの容量の振替に伴う河川環境面への影響の配慮について御意見をいただきました。利根川では、国土交通省と水資源機構が管理する8つのダムと渡良瀬遊水地について、平時から統合管理を行っております。ダムの管理に当たっては、図で示すように、6つの地点において、河川に必要な流量を確保できるように管理を行っているところです。ダムの容量の振替を行う際も、こういった地点における河川流量の確保など、河川環境面での影響について検討してまいります。80ページを御覧ください。流水の正常な機能を維持するため必要な流量の検討結果を整理しています。こちらは利根川本川でございすが、維持流量については設定の根拠となる各項目を点検し、著しい変更が生じていないため、栗橋地点、利根川河口堰下流地点とも変更はありません。水道用水、工業用水、農業用水として必要となる流量については、必要な流量を点検したところ、栗橋地点においては、ダム整備等に伴う水利用の増加により増加していることが分かりました。このため、流水の正常な機能を維持するために必要な流量は、栗橋地点においてはかんがい期は120 m³/sから122 m³/sに、非かんがい期は80 m³/sから86 m³/sに変更が必要と考えております。利根川河口堰下流地点においては変更ありません。81ページを御覧ください。江戸川についても同様に整理しています。維持流量については変更ありません。水道用水、工業用水、農業用水として必要となる流量については、野田地点については増加していることが分かりました。このため、流水の正常な機能を維持するために必要な流量は、野田地点においては非かんがい期は30 m³/sから32 m³/sに変更が必要と考えております。江戸川水閘門地点においては、変更ありません。82ページを御覧ください。鬼怒川についても同様に整理しています。佐貫地点において、維持重量は変更ありません。各種用水に必要な流量については、佐貫地点についてはダム整備等に伴う水利用の増加により増加していることが分かりました。このため、流水の正常な機能を維持するために必要な流量は、佐貫地点においてはかんがい期は45 m³/sから51 m³/s、非かんがい期は7 m³/sから8 m³/sに変更が必要と考えております。83ページを御覧ください。渡良瀬川についても同様に整理しています。大間々地点においては、維持流量は変更ありません。各種用水として必要となる流量について</p>

発言者	内容
	<p>は、水利用の減少により減少していることが分かりました。このため、流水の正常な機能を維持するために必要な流量は、大間々地点においてはかんがい期は2.5 m³/s から2.4 m³/s に変更が必要と考えております。</p> <p>84ページを御覧ください。中村太士委員からは、遊水地を活用した生態系ネットワークの形成について御意見をいただきました。関東地域においては、平成25年に関東エコロジカルネットワーク推進協議会を設立し、生態系ネットワークの形成に取り組んでいるところでございます。左側にありますように、渡良瀬遊水地や稲戸井調節池、利根川下流部、利根運河ではコウノトリやコジュリンなどをシンボルとした湿地環境整備を進めています。今後、新たに整備される遊水地も含めて、引き続き湿地の保全・再生に取り組めます。85ページを御覧ください。高村委員からは、遊水地の管理を通じた豊かな湿地環境の創出について御意見をいただきました。平成24年7月にラムサール条約湿地に登録された渡良瀬遊水地においては、平成25年に渡良瀬遊水地保全利用協議会を設立し、湿地の「保全・再生」「賢明な利用」「交流・学習」に取り組んでいるところです。湿地の保全・再生については、右上に記載してございますように、地域住民等による清掃活動や治水上掘削が必要な場合に、外来種の増殖等によって環境が悪化した場所を掘削する。ヨシ焼きによる樹林化の防止をするなどの取組を実施しており、今後も湿地の保全・再生に取り組んでまいります。</p> <p>86ページを御覧ください。高村委員、中村公人委員からは、霞ヶ浦、渡良瀬遊水地の水質について御意見をいただきました。左上のグラフが霞ヶ浦のCODの値です。青が西浦、緑が北浦で、現時点では西浦、北浦ともに赤色の環境基準を上回っています。このため、「霞ヶ浦に係る湖沼水質保全計画」を策定し、水質浄化対策を実施しています。8期目の期間となる令和3年度から令和7年度までは、下水道整備、農業排水対策、流入河川への浄化施設整備などで流域での負荷削減対策を進めるとともに、湖内での浄化施設の整備、底泥しゅんせつなど、流入負荷抑制対策を実施しています。湖内での浄化施設の整備は、右上に記載してありますように、植生帯により河川からの流入水を滞留させて、水質悪化の原因となる物質を沈殿させ、水質を浄化するものです。波を弱める効果もあり、ヨシ等の植物の再生が促されることによる水質浄化の効果も期待されます。87ページを御覧ください。高村委員からは、窒素、リンをモニタリングすることの重要性について御意見がありました。左下のグラフは、霞ヶ浦、渡良瀬遊水地の窒素、リンのモニタリング結果でございます。青が西浦、緑が北</p>

発言者	内容
	<p>浦で、上段のグラフの窒素、下段のリンともに現時点では赤の環境基準を上回っていますが、先ほど説明いたしました取組によって徐々に改善していけるものと考えているところです。引き続きCODや窒素、リンなどのモニタリングを実施しつつ、水質の改善に取り組んでまいります。88ページを御覧ください。高村委員からは、霞ヶ浦の水位が高く運用されていることによる妙岐ノ鼻のヨシ原への影響について御意見をいただきました。霞ヶ浦では、地域の産業や生活を守る各種用水を供給するための水位運用を行っています。左側のグラフを御覧ください。霞ヶ浦の抽水植物群落と浮葉植物群落の面積は、平成8年の霞ヶ浦開発事業の管理開始以降では、平成9年から11年の間に若干減少しておりますけれども、近年は安定している状況です。右側のグラフを御覧ください。妙岐ノ鼻地区の植生でございますけれども、平成10年以降、群落面積の大きな変化はありませんが、平成28年以降は、青色で示しているカサスゲーヨシ群落の面積が、緑色で示してございます、多様性が高い植生種のカモノハシヨシ群落の面積を上回っている状況です。霞ヶ浦の水位運用が湖岸植生に与える影響を確認するため、引き続きカモノハシを対象としてモニタリングを継続してまいります。</p> <p>89ページを御覧ください。左上のグラフのように、霞ヶ浦では特定外来生物であるミズヒマワリ、ナガエツルノゲイトウの群落面積が、平成28年度から令和3年度までの間で急激に増加しています。右上の写真にございますように、効果的な防除方法を確認するため、関係自治体、関係機関と連携し、試験施工として刈取り、食酢散布、シート被覆、オイルフェンスによる拡散防止を実施し、モニタリングを行っています。引き続き、地域と連携して取り組んでまいります。</p> <p>90ページを御覧ください。中北委員からは、気候変動に伴う降雪の変化の環境面への影響について御意見をいただきました。左下のグラフは、矢木沢ダム地点、尾瀬沼地点における積雪深を示しております。横軸が時間で、左端が11月、右端が6月となっております。縦軸は積雪深で、線の色は、緑が一番古くて昭和44年から平成2年6月までの平均、黄色が平成2年11月から平成22年6月までの平均、青が平成22年11月以降の平均となっております。矢木沢ダム地点のピークの積雪量は、過去と比べて増加しています。また、ピークに到達するまでを比較すると、過去と比べて積雪が始まる時期が若干遅くなってきていますが、積雪が始まると積雪深の増加量が多くなっています。ピークに達した後を比較すると、過去と比べて積雪の減少量が多くなっており、積雪がなくなる月が若干早くなっています。一方、尾瀬沼地点は、過去と比べて積雪が始まる時期が若干遅くなって</p>

発言者	内容
	<p>いる、積雪がなくなる時期が若干早くなっているという点では、矢木沢地点と共通していますが、ピークの積雪量は過去と比べて減少しています。また、右側に示した図は、片品川において積雪深と流出量などのモニタリングを行っている結果をお示ししたものでございます。融雪に伴う出水は、治水面、利水面、環境面ともに影響を受けると思われ、引き続きモニタリングを実施してまいります。</p> <p>続いて、総合土砂管理について御説明いたします。92ページを御覧ください。総合土砂管理について、前回までに委員からいただいた御意見です。里深委員から、火山噴火の利根川上流ダム群への影響やその備えについて御意見をいただきました。94ページを御覧ください。山地領域では、直轄砂防事業、直轄火山砂防事業、直轄地滑り対策事業を実施しており、引き続き土砂流出対策を推進します。ダム領域では、現時点で施設の機能を阻害する堆砂には至っておりませんが、堆砂の進行が著しい下久保ダムにおいては堆砂対策を検討、実施しています。河道領域では、砂利採取規制以降、河床はおおむね安定傾向です。海岸領域は、利根川河口部、河床、海岸汀線ともに安定しています。江戸川河口部も安定しています。95ページを御覧ください。下久保ダムは堆砂が進んでおり、現時点では洪水調節容量への影響はありませんが、計画堆砂量を上回っている状況です。このため、貯砂ダムの設置や掘削等を実施してございます。96ページを御覧ください。利根川流域には6つの活火山があり、このうち浅間山、草津白根山、日光白根山の3つは、監視・観測体制の充実が必要な火山として選定されており、24時間体制で観測・監視が行われているほか、火山噴火緊急減災対策砂防計画が策定されています。また、浅間山では国土交通省が直轄事業で火山対策を実施しているほか、草津白根山でも平成30年の噴火を踏まえて砂防堰堤を整備しています。ダムで適切な対応が取れるよう、火山情報の速やかな共有などに努めてまいりたいと思います。</p> <p>続いて、流域治水について説明します。99ページを御覧ください。利根川水系での流域治水プロジェクトについては、8つの協議会において検討を進め、令和3年3月にプロジェクトを策定、公表し、プロジェクトを推進してございます。100ページ以降に、そのプロジェクトの概要をお示ししています。河川整備に比べ、集水域、氾濫域における治水対策のところで御説明した対策などを盛り込んでいます。106ページを御覧ください。流域治水の取組を加速するため、令和5年12月に群馬県を流れる休泊川、新谷田川、新谷田川放水路が、「特定都市河川」及び「特定都市河川流域」に指定されています。休泊川流域は、平成29年台風21号や令和元年東日本台風によ</p>

発言者	内容
	<p>り大規模な浸水が発生しており、今後、ハード・ソフトを組み合わせた効果的な対策を流域水害対策計画として取りまとめ、浸水被害の防止軽減を目指すこととしています。</p> <p>続きまして、資料3、本文について御説明をいたします。資料3を御覧ください。新旧対照表の形でお示ししています。現行の基本方針から修正を行った部分を赤字で示していますが、ポイントとなる部分について説明いたします。左側の番号でいうと、10から12のところは、利根川流域の自然環境の現状について、本川の各区間や支川の内容について記載を充実させていただいております。次に、23、特定外来生物の確認状況について追記してございます。24、利根川の歴史的経緯を振り返る必要について多くの委員から御意見をいただいていることから、本川中流部の中条堤や狭窄部による江戸市中の洪水防御のシステム、こういった利根川の歴史的な経緯について追記をしています。25、中条堤の決壊や狭窄部の拡幅の経緯を追記してございます。26から35につきましては、本川の各区間、それから支川についての河川整備基本方針策定の経緯について追記してございます。36、鬼怒川の堤防が決壊した平成27年9月の関東・東北豪雨を踏まえて、「水防災意識社会再構築ビジョン」を策定し、タイムラインや広域避難の仕組みの検討を進めてきたことを追記してございます。37、八斗島上流域の3日間雨量が最高を記録し、国管理区間の多くの水位観測所で観測史上最高値を記録した令和元年東日本台風を踏まえて、流域治水プロジェクトを進めてきたことについて追記してございます。あと、特定都市河川の指定についても追記させていただいております。39、河川管理者とダム管理者、関係利水者が治水協定を締結し、進めてきた治水ダムを含めた事前放流について追記してございます。42、閉鎖性水域である霞ヶ浦等の湖沼における水質の状況や、水質改善の取組について追記しています。43から45、河川の利用状況について、特に支川での取組の記載を充実しています。</p> <p>48、想定最大規模の洪水についても、人命を守り経済被害を軽減するために、あらゆる関係者が協働して対応するという考えを追記してございます。50、取組の推進のための水理・水門や土砂移動、水質、それから動植物の環境に係る調査の実施、降雨一流出特性、流下特性、降雪・融雪量の変化や、河川生態系への影響の把握に努めることや人材育成について充実してございます。特に上流域の山岳地帯での冬季の降雪が多いことを踏まえる必要性についても記載してございます。52、水のもたらす恩恵を享受できるように、流域の関係者が連携して水循環の維持・回復を進めることについて追記してござい</p>

発言者	内容
	<p>す。53、河川の有する多面的な機能の発揮のための適切な維持管理や、予防保全型のメンテナンスサイクルの構築について追記しています。54、55、関係者の連携による総合的な土砂管理の推進、気候変動の影響の把握も含めた土砂動態の把握について追記しています。</p> <p>58、ここからは災害の発生の防止または軽減についてでございますけれども、本川中流部の中条堤や狭窄部による江戸市中の洪水防御システムや、明治43年の大洪水を契機とした狭窄部の拡幅やカスリーン台風以降、上流の洪水調節施設を位置づけてきたこと、それから現行基本方針において利根川放水路が見直され、下流の河道配分が増大したことなど、河川整備の経緯を記載するとともに、技術の進展を見据えた河道掘削、洪水調節機能の強化、水系として本支川ともバランスよく治水安全度を向上させることを方針として整備を行うことを追記しています。また、利根川は氾濫域に首都圏を抱え、洪水氾濫による被害想定が極めて高いこと等を踏まえ、整備途上での施設規模を上回る洪水、計画規模を上回る洪水に対する被害最小化対策として、洪水リスクを踏まえたさらなる堤防強化にも取り組んでいくことを記載してございます。59、本川・支川の全体に対する基本的な考え方として、遊水地、調節池について、技術的革新を推進しながら越流堤の可動堰化等の整備を行うこと、事前放流により確保可能な容量の利用、利水容量と治水容量の振替を含むダム群の再編とかさ上げ、放流能力の増強、気象予測技術の進展を踏まえたより効果的な操作ルールの採用など、既存の洪水調節施設の徹底的な有効活用について記載を充実しています。また、洪水調節施設等の整備に当たっては、地域の協力が得られるように努めるとともに、流域全体の治水安全度の向上を図るため、地域の協力に対して、流域一体で理解が進むように努めることについて追記しています。また、河道の維持や河道の貯留効果の増大、高度に河道や流水を管理する技術を検討していくことも記載してございます。65、支川のうち、小貝川については、昭和61年洪水の規模が基本高水の変更案を上回る規模であることを踏まえ、昭和61年洪水と同規模の洪水やそれを上回る洪水に対し、流域治水の取組により被害の最小化を目指すことを記載しています。71、堤防が決壊すると甚大な人的被害を発生する可能性が高い区間について、高規格堤防の整備を行うことについて記載をしています。72、気候変動により頻発化している土砂・洪水氾濫について、対策を実施することについて追記しています。80、被害対象を減少させるために、中高頻度の確率規模の浸水想定など、多段階のハザード情報の提供など、水害に強い地域づくりに技術的な支援を行うことについて追記しています。81、ハザードマップやタイムライン、防災訓練などの支</p>

発言者	内容
	<p>援、洪水予報、水防警報の充実など、ソフト対策について充実しております。ここから河川環境の整備と保全でございます。</p> <p>86、河川環境の整備と保全については、利根川流域の環境の特徴を踏まえ、河川環境管理の目標を定め、生態系ネットワークの形成にも寄与する河川環境の保全及び創出を図っていくことを記載しています。また、治水と環境の調和を図った多自然川づくりや自然再生を推進し、良好な河川環境の保全と創出を図ることを記載してございます。87から98は、先ほど御説明させていただいた本川の各区間支川別の環境整備の目標を追記してございます。99、特定外来生物の対策について記載しています。102、霞ヶ浦、渡良瀬などの水質改善について、下水道等の事業や関係者と連携して取り組むことを追記してございます。</p> <p>ここから基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項でございますけれども、108から112に基本高水のピーク流量、洪水調節流量、河道配分流量について変更してございます。</p> <p>次に、主要な地点における計画高水流量に関する事項でございますけれども、114から127に計画高水流量について変更してございます。</p> <p>次に、主要な地点における流水の正常な機能を維持するために必要な流量に関する事項ですけれども、131から132で水利権量について変更しています。133で、流水の正常な機能を維持するための必要な流量について変更しています。資料の説明は以上となります。</p>
【小池委員長】	<p>膨大な資料の御説明ありがとうございました。それでは、今御説明いただきました資料1と資料3、本文の新旧対照表でございますが、これにつきまして御意見を各委員からいただきたいと思っております。御意見のある方は挙手をお願いしますが、まず会場に参加いただいております戸田委員から、その後、ウェブ参加の委員からお願いしたいと思います。</p>
【戸田委員】	<p>資料3の本文について、これまで議論してきた内容がしっかり盛り込まれた本文が提示されていると思えました。特に、資料3の36ページ、59行目で、遊水地、調節池等での技術革新の推進や、あと同じ36ページ、59行目の次の段落のところにある、河道貯留等を含めた高度に河道や流水を管理する技術を検討しながら河川管理を行っていくことなど、この小委員会の中で議論されたことがしっかり反映されていると思えました。今日御説明いただいた環境のところと総合土砂に関するところで少し意見がありますが、環境について、資料3だと46ページぐらい、左の番号でいうと86から99にかけて各箇所での環境の目標が書かれています。場所によってそれぞれの環境</p>

発言者	内容
	<p>目標が違うから、一概に言いづらいところがあるのですが、利根川水系の環境の中で、資料1で御説明いただいたときに砂の河原とか礫の河原の再生という言葉が出てきていて、そういった礫河原の再生とか砂河原の再生というのは、土砂の管理や土砂動態とセットとなって初めて達成されることになるのですが、環境のところには土砂管理との連携のような言葉が、私の見る限り見当たらず、環境の基盤を形成するためにもその土砂管理をしっかり行って行って、その上に資料3で書かれているような環境が形成される方向に進んでいくことが分かるように書いていただくのが大事だと思います。資料1の総合土砂のところでも、河道については砂利採取以降、比較的安定傾向という表現だったんですけど、むしろ環境の側面から見ると、二極化とか固定化が進んでいることが樹林化につながっていて、礫河原とか砂河原の再生を考えるうえでは課題になっているところだと思いますので、その辺は総合土砂のところの書き方も固定化していることが、ポジティブというよりは環境面では少し課題にもなっていることが分かるような形で、表現いただくのがいいと思いました。以上です。</p>
<p>【小池委員長】</p>	<p>ありがとうございます。もう二、三名の委員からいただいた後に、事務局にお答えいただくという進め方にしたいと思いますが、よろしいでしょうか。それでは次、中北委員、お願いいたします。それからその次、中村太士委員、よろしくお願いたします。</p>
<p>【中北委員】</p>	<p>ありがとうございます。大きく2つ、簡単に述べさせていただきます。1つは、最初の資料の90ページ、環境に関連するところで積雪深の変化を丁寧に調べていただきまして、ありがとうございます。既にいろんな影響が出てきているというのはここで見えたと思いますので、先ほどの御説明では引き続きモニタリングを続けられるということで、ありがとうございます。加えて、河川整備方針を考えると、30年先までですので、2度上昇のときにおよそどうなるかというのは、今後、d4PDF5キロメートルとかありますので、それでまた見ておいていただくのは大事なことかと思っておりますので、モニタリングに加えて、科学的予測情報を上手に使っていただいて、見込みを見ておいていただくのが大事かなと思いました。まずはチェックいただきまして、どうもありがとうございました。それからもう一つは、最大クラス等に関連するところなんですけれども、本文でも46番のあたりで、利根川水系では想定最大規模までと。これほかでも同じような想定最大規模までとは書いてあるんですけども、大都市圏を控えたところであるので、こちらもある程度の見積りを持っておくというのは非常に大事ということで、さっきの雪のところの一つ申し上げるのを忘れました。77ページのところで、八斗島上流域の話</p>

発言者	内容
	<p>ですけれども、さらに上流、矢木沢のところと、それからさらに下流のところでは雪が多い、そうでないところというので、ダム間の容量再編イメージというのを考えていただいているところですので、これもちょっと前回申し上げましたが、積雪等が将来変わる中で、冬季の降雪量の代わりに降水量として雨が降っても平時に貯水しやすくなるので、そのまま降水が雪に代わって降ってくれたら問題ないと思っていますが、また将来予測でチェックはしておいたほうがいいのかなというふうに、77ページに関しても思っています。それから最後ですが、長くなってすみません、23ページですけれども、19年の19号台風で疑似温暖化をしていただいて、流量を調べていただいたところ、流量を計算していただいて、今回の新しい基本高水では十分押さえられているというのは見せていただきました。ありがとうございました。大変手間を取った形で計算していただいたと思います。ただ、先ほど本文の46番のところ、想定する最大規模までということを見ると、すぐできるものとしては、19号台風の4度上昇、4度上昇にならないただけれども、危機管理により一度流量は算定しておくというのは大事な事かなと思っていますので、ここまでできているんだとしたらその情報も、環境省は雨のほうは出されていると思いますので、それを使ってやっていただくと。それから少し手間はかかりますけれども、できたら近い将来にはカスリーン台風の、40キロメートルの情報をまたダウンスケーリングすると細かい情報になりますので、カスリーン台風で2度上昇はどうかというのは非常に興味があり、大事なところだと地元でも思われますので、ぜひそちらも今後トライしていただければなというふうに、こちらは感じましたという言い方にさせていただきますが、できればすることを推薦したいと思っています。以上です。どうも時間いただきましてありがとうございました。</p>
<p>【小池委員長】</p>	<p>どうもありがとうございます。それでは、中村太士委員までいって、一度、事務局にお答えいただいて、その後、中村公人委員、高村委員、少々お待ちください。森委員もお待ちください。それでは、中村太士委員、お願いします。</p>
<p>【中村（太）委員】</p>	<p>ありがとうございます。実は今週の火曜日と水曜日に利根川を、特に環境面から見せていただきました。事務所の方々、大変ありがとうございました。その際もこの資料で説明されていて、いくつか既にコメントはそのときにしました。特に環境目標、冒頭で廣瀬局長がおっしゃっていただいた、生物の生息・生育・繁殖場、通常、環境の目標をどうやって考えていけばいいのかという議論の中で、今回の利根川を考えると、例えば掘削をする場合に、どんな掘削断面があって、当</p>

発言者	内容
	<p>初は実は掘削断面でどんな環境ができるかということが多少は書いてあったんですけど、例えば番号でいうと、74ページなんかはそうなんですけれど、今回は青字のところと下の断面のところがうまく結びついた形で、掘削するとどんな環境ができて、それが結果として、そこで大事にしている生物種にどんな影響を及ぼすんだろうかという、その紐付けが整理されていると思いました。つまり、掘削する意味が、治水容量を確保するというだけではなくて、環境にとっても大事だということが伝わるんじゃないかと思ったので、とてもよくなったと思います。ちょうど出ているのでこの右側の、例えばX掘削という言葉をもそんなに大きなこととして捉えないほうがいいんじゃないかなと正直思いました。現地も見せていただきました。多分、X掘削をすべきという心は、多様な環境を創出したいということをもX掘削という技術によってつくっていきたいということだと思っておりますが、もっと大事なことは、結局、多様な環境がそれぞれの生物に対してどんな影響を及ぼすのかということをもきちんと紐付けして説明することだと思っておりますので、技術だけの言葉ではなくて、対象とする生物種を考えた上で、X掘削はどんな環境創出に役に立つんだという表現にさせていただけたらいいのかなと思っております。今見えているのが鬼怒川だと思うんですが、鬼怒川のカワラノギクの、後の方でスライドでも出ていたと思うんですが、市民の方々が一緒になって、域外ではないんですけども、洪水にはほとんど浸からない場所に礫を置いて、そこで絶滅しそうなカワラノギクの個体群を繁殖させて種子を取って、実際に川沿いの浸かりそうな場所にまいているといったような、そんな地道な努力がなされていまして。それ自体は、個体数が少なくなってしまったカワラノギクを保全するために大事な行為だと思うんですが、どうもその効果がいま一つ把握されていない。つまり、種子を実際の冠水する場所に、もしくは礫河原の場所にまいた後、どの程度カワラノギクなり、礫河原を生息場とする生物が増えているのかというのがいま一つ見えづらかったんです。市民の方々と一緒にやられている大変いい事例だと思いますので、そういった域外保全をして、種子を礫河原にまくことがどういう効果を生んでいるのかということをも検討していただいて、それを広げていくべきなのかどうかも含めて考えていただきたいと思っております。鬼怒川を掘削した当時は礫河原だったと思うんですが、そこにもここにあるようなシナダレスズメガヤとか、細粒分を捕捉するような外来種が入ってしまっていて、少し緑が濃くなっているなという感じがしました。そういった意味では、今回の掘削高というのが本当に妥当だったのかどうかも含めて、もう少し下げてもよかったんじゃないかなと思っておりますので、その辺も御検討いた</p>

発言者	内容
	<p> できればありがたく思います。この辺は順応的管理というか、試験をやってみてうまくいかなかった場合に、もう一度違った考えで河道の掘削を試みるという流れが必要なのかなと思いました。先ほど戸田先生からもあったように、私も最後のほうで言われた総合土砂管理の、例えばダム堆砂が予定どおりになっている場所もあるんですが、それ以上に進行しているところもあって、例えばここではダム堆砂に対して下流に置土をしたりとか、そういうことを考えなくていいのか、その辺がちょっと説明がなかったのも、もし後で御回答いただければ、置土をやっているのかも含めて教えていただければと思いました。あと、五十里ダムでしたか、多分フラッシュ放流をやっているというふうに載っていて、そのダムにおける環境保全対策というのが不明でした。多分、目的は繁茂した藻類をフラッシュして流すといったような意味だと思うのですが、その辺の水の流れを使った環境保全、流水のパルスを与えることによって環境保全をしようという考え方で、それ自体は大事だと思うので、その効果はどうかということも教えてください。最後に、84ページにある、いわゆる生態系ネットワークで、コウノトリやトキというのがここで繁殖もしたりしていて、シンボル種であるということは理解しています。一方で、先ほど言っていた生物の生息場の環境目標の委員会では、こういうカリスマ的な種だけに着目した生態系ネットワークではなくて、様々な種が生育できるようなエコロジカルネットワークを考えていくべきだという意見があったのを覚えています。コウノトリやトキというのは一般の方々に関心を集める上でも大変重要だと思いますので、それ自体は結構なんですけど、こういったコウノトリやトキの生息場所をつくるのが他の種にとってもプラスに働くという考え方が必要です。どちらかというとアンブレラ種的な意味で、他の種にとってもこういった形で貢献できるんだということもきちんと書いておいていただけると、ただコウノトリ、トキだけを保全しているんじゃないということが伝わるんじゃないかなと思いました。以上です。 </p>
<p>【小池委員長】</p>	<p> どうもありがとうございました。それでは、ここで戸田委員、中北委員、中村太士委員からの御指摘事項に関して、事務局のほうからお答えいただければと思います。 </p>
<p>【事務局】</p>	<p> 環境の方はまとめてお答えしたいと思います。まず中北委員から積雪の将来予測、d4PDFなどもできているので、そういったことも考えてはどうかということで、将来予測についてもどういったことができるのか、d4PDFのデータは揃っているのかもしれませんが、検討して、また御相談させていただければと思っております。疑似温暖化実験の4度上昇、これは環境省とコミュニケーションを取っ </p>

発言者	内容
	<p>て、どういったことができるのかを考えていければと思っております。カスリーン台風についても、御相談をさせていただきたいと思っております。それから、戸田委員と中村太士委員から、総合土砂管理の技術と取組について御意見をいただきました。確かに本文中で、総合土砂管理と環境のところの記述が少し不足しているかなと思っております。大事な観点だと思っております。X掘削については、船底型掘削とか、ネーミングや技術のことばかりが確かに前面に出過ぎているところがあります。やっていることの意味は、多様な環境をつくり、生物の生息場としてよい環境を創っていくということだと思っておりますので、そういうところをきちんと意識しながら進めていければと思っております。そのほかは、中村太士委員からいただいた、市民の取組によるカワラノギクの移植の話で、効果がちゃんと把握されてないところは、効果が出ているのかどうかということもありますが、効果があったのか無かったのかということが市民を巻き込んでいくポイントでもあると思っておりますので、少し調べていきたいと思っております。あと、事実確認関係で、ダム堆砂の置土とフラッシュ放流の効果については、豊口課長、すみませんが、お願いします。</p>
<p>【豊口河川環境課長】</p>	<p>河川環境課長の豊口です。置土については五十里ダムで実績がございます。また同じく、五十里ダムではフラッシュ放流によって付着藻類の剥離、更新であるとか河床堆積物の粒層、それに併せて河川景観の向上等の効果が確認されているところだと思っております。そのほか、いくつか中村太士委員から御指摘のあった、生態系ネットワークでシンボル種だけ強調し過ぎないようにということは、シンボル種はみんなの旗印としては大事ですけども、生態系全体が大事であるということをしっかり訴えてまいりたいと思っておりますし、X掘削みたいな技術自体はいろいろ進化していくものなので、基本方針のような長期的なものは、どちらかというと技術的な掘り方のものよりも考え方のほうが大事だということだと思っておりますので、中村太士委員の御指摘のとおり、記載ぶりも考えていきたいと思っておりますし、そのほか土砂管理のところとか、さっき小澤室長が言ったとおりですが、記載ぶりの不十分なところは再検討させていただきたいと思っております。ありがとうございます。</p>
<p>【事務局】</p>	<p>すみません。あと1点、置土については、下久保ダムのところで、下流土砂還元を実施していることが確認できています。以上です。</p>
<p>【小池委員長】</p>	<p>どうもありがとうございます。戸田委員、中北委員、中村太士委員のほうから、今の御対応でよろしいでしょうか。何か付け加えていただくことございますでしょうか。</p>

発言者	内容
【中北委員】	ありがとうございました。
【中村（太）委員】	置土の環境に対する効果みたいなものは調べていないですか。その辺が多分、環境面から見ると今後大事になると思います。生物の環境目標の委員会の中でも、総合土砂管理というか、土砂の流れが生物にとってすごく重要だという意見があつて、今後、様々な川でこういった取組をやってほしいと言うためにも、これまで実施されたところでどんなふうに生息場に対して影響したのかということ、データとして積み上げていくべきだと思います。その辺についてデータはあるでしょうか。
【豊口河川環境課長】	置土をしている場合、モニタリングは必要で、モニタリングの結果は今私の手元にないですけれども、あるはずですので、調べてまた整理しておきたいと思います。ありがとうございます。
【小池委員長】	どうもありがとうございます。今お話しのありましたフラッシュ放流の話と置土については、資料はつくれますでしょうか。資料をつくっていただいて、委員の皆さんと共有していただくようにしたいと思います。それでは、お待たせしました。中村公人委員、高村委員、森委員、里深委員、この順番でお願いしたいと思います。中村公人委員、お願いいたします。中村委員の音声ははっきり聞こえないようでございます。後でお願いできますでしょうか。そしたら高村委員、お願いいたします。
【高村委員】	ありがとうございます。資料1の87ページの霞ヶ浦のところなんですけれども、左の下、環境基準を超えているという表現なんですが、現在の数値は環境基準値の2倍以上で、富栄養化の程度がかなり深刻な状況であります。それで86ページの御説明に、湖内の浄化施設などそのほかいろいろ、第8期の環境省の水質保全計画も加味して対策をしているので、落ち着いていくだろうという御説明だったんですが、基本的に湖の場合は、湖内に一旦窒素・リンを入れてしまったら、ご説明いただいたような湖内での浄化の取り組みをしても、なかなか効果が発揮しづらいということが分かっています。その辺をよく認識していただいているのかどうか。というのが、資料3の42番の書きぶりを読ませていただきますと、平成18年のときは水質汚濁が著しいと書かれていますが、今回の書きぶりがえらくさっとしておりまして、もっと注意を喚起する書きぶりを変えていただきたいということでございます。霞ヶ浦の管理については、事前に関東整備局の方が説明に来てくださって、皆さんよく分かっておられるんですが、霞ヶ浦の不幸は、霞ヶ浦が国交省の管理、その流域の管理は県と分かれていることです。湖沼、特に湖沼の水質は流域を一体に管理していかないと、過栄養化の問題は解決しないと思います。流域は県管

発言者	内容
	<p>理だから県に任せて、国交省は湖内の管理を扱うので湖内の浄化をするというように、別々にやっている限りにおいては問題が解決しないので、一体的な取組、つまり、流域の水質保全の対策ということを国交省も真剣に取り組んでいただきたいというのがお願いです。次に、88ページの霞ヶ浦の湖岸植生帯の状況は、平成8年を基準にあまり減っていないと言っておられるんですが、それ以前のデータがあるはずで、私など高齢者は、それ以前の状況はよく覚えているわけで、植生帯はもっと豊かであったわけですから、グラフの表示の仕方が何で平成8年から書いているのかというのが恣意的です。データがあるので、資料として出してください。周辺住民、霞ヶ浦の周りの方たちは植生帯の再生、昔もっとあったわけですけども、その辺を望んでおりますので、その点を鑑みもう少し考慮して管理事業を進めていただけるようお願いいたします。以上です。よろしくお願いいたします。</p>
【小池委員長】	<p>どうもありがとうございました。それでは、高村委員の次が、森委員、お願いいたします。</p>
【森委員】	<p>よろしくお願いいたします。先ほど中村委員、あるいは高村委員もおっしゃられたこととかぶる部分がありますので、それは除くとして、最初に資料1の68ページ、これ表記の仕方ということになりますけれども、魚類相の現状というのが左上のほうにあります。この分類というか、区分の仕方が普通種、重要種、外来種という形で、3区分になっています。これはこれで一つの表記としてはいいんですけども、知りたいのは、生活史でどのような変化があるかということも知りたい。つまり、純淡水魚なのか、あるいは汽水性の魚がどれほどいるのかということの変化、それによって河川の、言わば水系の連続性というものに、そういったことから理解することができますので、あるいは分類でもいいかもしれません。コイ科とかハゼ科といったようなことでもおおよその分類から生活史が類推できますので、そうした表記の仕方も検討いただければということが1点目でありませう。それと本文につきましては、これまで河川環境の管理の中で整備とか保全とか創出、特に創出という言葉がしっかりと入っていたり、動植物の生息・生育、そして繁殖の場という文言がしっかりと入っているということと、それと特定外来生物への対応ということが明記されておりますので、こうした点も今回の小委員会の一つの大きな成果になっているのではないかと思います。ただ、利根川という点に関していいますと、特に特定外来生物ということではいいますと、本文の二十何番でしたかね、外来種のことを少し表記されているところがあったかと思いますが、ちょっとごめんなさい、私のほうで確認をい</p>

発言者	内容
	<p>たします。これか。例えば23番、番号で申し上げますけれども、ページでいうと12ページ、ここに関しまして、魚類ということで特化させていただきますけれども、コクチバス、ブルーギル等という書き方、これはある意味、全国的な話でもありますけれども、利根川という観点からすると、これ文言が長くなってしまいますので、これちょっと検討いただければということになるかもしれませんが、アメリカナマズとか、たしかオオタナゴも特定外来生物ということで、特に利根川流域においては一種の特化した特定外来生物ということでもありますので、最近ちょっと広がってはいるんですけども、利根川から拡散しているということも見聞きますので、そういった文言、種名も入れていただけるといいかと思えます。それと、土砂管理につきましてはもう繰り返しませんけれども、一方で、洗掘とか掘れるという現象はないのかということが少し気になりました。先ほど来、中村太士委員もおっしゃられた部分のところの、あるいは戸田委員がおっしゃられたことなどは多分、本文案としては55番とか56番の辺りに少し膨らまして書いていただくことになるのではないかと考えておりますので、次回少し検討いただければと思います。それと生態系ネットワークというところに関しては、提案ということになりますけれども、アンブレラ種という観点だけではなくて、利根川のような大物の河川においては、その中のさらに生態系的な区分というのができないのかどうか。例えば今、木曾川のほうでは、扇状地遊水地区でしたかね、地域でしたか、それと氾濫源区域、それからいわゆる汽水区域みたいな形で、その地域における広い範囲の中においてもいくつかの区分に分けられるということで、言わば生態系的な区分ということが利根川では検討できるのかどうか。私はあんまり利根川のことは詳しくないので分からないんですけども、そういう形で区分ができれば、その中にアンブレラ種はどのような形でののかということも少しリアリティーを持って検討できるのではないかと。あるいはこれは計画マターということになるのかもしれませんが、例えば木曾川や利根川や石狩川のような大物河川に関しては、そういう形で3つ4つぐらいに区分をして検討するというのも、生態系ネットワークということで、さらに小区分として検討するというのもあっていいのではないかと。それと今、ぱぱっと見ていて気がついたことですが、これはちょっと細かいことなので、後でまた事務局のほうに申し上げればいいことですが、本文案の88番、48ページ、出ますでしょうか。88番の最初の一番上の上流部ではアユ、ウグイ等の云々と。これは「上流部では」が次のムサシノジュズカケハゼにもかかると思われるので、「上」の前に「中」も入れておいたほ</p>

発言者	内容
	うがいいという指摘です。このムサシノジュズカケハゼに関しては、上流域だけではなくて中流域のたまりのようなところにもいますので、その辺、少し書き加えておいていただければいいということでの指摘であります。以上です。ありがとうございました。
【小池委員長】	どうもありがとうございました。中村公人委員、お願いいたします。
【中村（公）委員】	ありがとうございます。資料1の61ページに田んぼダム、水田貯留の記述がございまして、特に水田面積の割合が大きい流域ではこの取組が重要になるかと思えます。また、流域治水プロジェクトのメニューにも入っているようです。本文案を見ると、それに関する記述が見つかりませんでしたので、該当するところに記載を御検討いただければと思います。以上です。ありがとうございます。
【小池委員長】	どうもありがとうございました。それでは里深委員、お願いします。
【里深委員】	先ほどの高村委員からの御指摘にもあるかと思うんですが、ダム堆砂のことについてなんですけれども、本来、流下すべきものをダムにためている現状というのは本体の資料の95ページにもあると思うんですが、これ計画堆砂にのっていれば問題ないという感じに見えるんです。必要に応じて対策を検討というんですけれども、具体の支障が懸念される場合というのは、実はこの計画堆砂にのっかっていても具体の支障というのは、ダムの容量が減るという支障だけではなくて、いろんな支障があるわけですよ。先ほどの説明で、超えているものについては緊急に今もやっているんですけどもということでしたけれども、基本的にはダム堆砂の中で下流に対して必要と思われる土砂は、計画堆砂を下回っている場合であっても、これは本来、下流に出すべきものだという扱いを、それを基本的にそういうふうにするものだというふうに変えていかなければいけないんじゃないかと私は思っておりますので、ここですぐさまどうなるということではないんですけれども、計画堆砂以内だからいいよねということではないと思います。以上です。
【小池委員長】	大変重要な御指摘ありがとうございます。そうしますと、もう一方、清水委員、お願いいたします。
【清水委員】	ありがとうございます。資料1の、利根川の環境で、資料1の70ページで紹介されているように、ここでは、砂州や低水路蛇行流路があつて、とてもよい生物の生息環境であると思えます。一方、この辺りの区間は、川俣の付近も含めて、流加能力が足りなく、高水敷幅をかなり削る区間でもあります。流下能力を上げるために堤防の近接するところまで掘ると、それに対しては、高水での流

発言者	内容
	<p>況計算から、それほど問題はないだろうというお話ではありますが、河岸侵食は流量の規模が小さいときに、河岸に向かう流れが起りやすいので、そうなると、ここでの地形である砂州や蛇行が影響します。中規模出水では、流れが堤防に向かってくるようになるので、削りしろのところの少ない所では、高水とともに、むしろ中小河川洪水と地形との関係が大きいと思います。流下能力を上げるという中で、治水と環境の調和というのを多摩川では福岡先生が大いに議論してきたわけですので、その辺りがうまく本文に書けると良いと思いました。あとは短く、本文で気づいたところを言ってもよろしいでしょうか。</p>
【小池委員長】	<p>お願いいたします。</p>
【清水委員】	<p>本文の19ページ、変更のところですが、資料ではよく書けているのに、渡良瀬の貯水池、谷中湖のところの中段の線のところ、近年ではコウノトリが生息、繁殖していると、本文では一言だけになっています。参考資料のほうではコウノトリが生息して、特に渡良瀬遊水地ではそこでつがいできて、繁殖したことが東日本では初めてとなります。様々な背景があったからこそコウノトリが生息・繁殖しているので、もう1行ぐらいいは、そういう努力があって、こういうものがなされているという言い方が大切かなと思いました。それから、12ページになりますが、このところで中条堤が出てきています。赤字のところ、本川中流部における遊水機能により江戸市中の洪水防御を図っていた。中条堤、遊水機能と言いますが、この当時は遊水氾濫許容機能とか、あるいは遊水氾濫許容により江戸市中を守ったというのが正確ではないかなと思います。遊水機能という意味合いが、本文の中で使っている遊水機能と中条堤のそれとは明らかに違う位置づけがあると思います。たしか氾濫許容区域と防護区域という言葉を使って中条堤を表現されていたこともあるので、中将堤の場合、遊水に氾濫許容という言葉を入れたほうがいいのではないかなと思いました。それから、段階的な施工の内容が本文にあります。43ページの77、ここは今回、全く修正がありません。本川・支川の整備に当たっては、バランスの取れた治水安全度の向上が図れるように段階的に行っていくということは、まずは優先順位を決めてしっかりやっつけていきたいと思います。江戸川分派と、それから本川上流の掘削、上流の洪水調節施設等が書いてあるんですけども、この辺、なぜ渡良瀬遊水地の、あるいは遊水地の機能増加とか、そういう文言が入ってこないのか。今回は上流部での河道は掘るけれども、下流には手をつけないというのは、渡良瀬遊水地を含む本川中流の区間で堰の可動化とか、そういう技術が強く打ち出されてきた訳ですので、もう</p>

発言者	内容
	<p>少し遊水池の機能強化みたいなものが優先順位を上げて、それから52ページです。赤字のところの下から2行目か3行目のところに、河川と流域住民等とのつながりや流域連携の促進という言葉で、これで端的には表しているんですが、もう少し水源地域と下流河川との上下流交流、あるいは水源地域の保全や持続的な活性化など、ダムフォローアップ委員会の中でも、水源地域の動態というのは重要な課題と認識されており、利根川水系では相当な数のダムがありますので、「水源地域との」という言葉が入っていただきたいと思います。最後、55ページ、ア、利根川の場合のところで、主要地点の計画高水流量のところですが、これは大変詳しく、アの上から3行目「さらに本川の流量を調節することにより」という、渡良瀬遊水地に対しては今まで合流ゼロ、影響なしから、本川流量調節まで入っているということになっているわけです。一方で、その下のところの、下流3池、田中、菅生、稲戸井では、本川の計画流量に影響を与えないものという効果だけで、本川流量調節までは考えないのかどうか、遊水地の機能強化であれば、渡良瀬遊水地はそれをやるけれども、下流3池はそういう機能増強は見込まないという感じがしています、その辺はどのように考えたらいいかというところがあります。以上です。長くなりました。</p>
【小池委員長】	<p>非常に重要な御指摘を的確にお示しいただきまして、ありがとうございます。それでは、事務局のほうから、今御指摘いただいたことについてお答えをお願いしたいと思います。</p>
【豊口河川環境課長】	<p>河川環境課長ですけれども、高村委員から御指摘いただいた、湖内の浄化設備ではどうにもならないというか、一旦入ってしまうとなかなか効果が出にくいということは我々も認識していて、流入源対策が湖沼の環境には非常に重要だと思っています。そういった意味で、湖沼の水質保全計画みたいなものを関係機関と一緒にやって、その中で河川管理者としてできるのが、湖内に入ってきたところの浄化設備だから、そういうふうには書いてはいるんですが、もうちょっと書き方についても工夫させていただきたいと思いますし、もうちょっと切迫感があるようにということだったので、書き方を検討したいと思います。また、平成8年以前のデータがないではないかという御指摘もありましたが、前回の基本方針からの変更点ということを強調するために書いたのですが、もうちょっとかつてのデータもお示しできればと思います。それから森委員からは、生活史などが分かるようなデータがというお話もあったので、ちょっと調べてデータを整理したいと思います。また本文の書きぶり、特定外来種について、ブルーギルなど一般的なものだけではなくて、利根川らしいものも、という話があ</p>

発言者	内容
	<p>りましたので、そういったものも追記していきたいと思います。生態系ネットワークのところは、先ほどもアンブレラ種だけでなくという話があったので、表記を直すところがあれば直したいのと、中上流というお話もありましたので、そこは直したいと思います。それから里深委員から、ダムの堆砂は計画堆砂を守っていればいいというのは、ダム管理上というか、容量管理上はそれでいいんですけども、河川環境上、総合土砂管理の観点からいうとそういうことではないので、やる必要があるなしという、マルかバツかみたいな問題ではなくて、堆積が進んでいるところは優先順位が高いことであることは確かですが、それだけではないというのは御指摘のとおりなので、記載ぶりを直すところがあれば直したいと思います。そのほかは小澤室長から。</p>
<p>【事務局】</p>	<p>中村公人委員が言われました田んぼダムの記載というのは、確かに本文で抜けておりますので、検討させていただきます。それから、森委員からあった河床低下については、近年は落ち着いてきているという認識でございます。あと、清水委員からの意見についても検討させていただきたいと思います。以上でございます。</p>
<p>【小池委員長】</p>	<p>清水委員からお話があった中で、蛇行して良い環境ができているところというのは、中小洪水のときに洪水流が堤防に当たる方向にいくという御指摘があって、環境と治水というのをそういうことまで一体的にどう考えるのかという御指摘だったように思うんですが、これは修文レベルではないように思うんですけども、いかがでしょうか。清水委員、そういう理解でよろしいでしょうか。</p>
<p>【清水委員】</p>	<p>全くそのとおりですが、その地点で治水と環境ともに調和するというのがなかなか難しいとも思います。例えば流下能力が足りなく河道整正しないとイケない箇所は、同区間で環境の代償地を作るとか、そこでの環境をほかのところで再現するなど、やり方があると思います。治水と環境の調和された形として利根川でできること、こういった箇所は、今後も出てくると思います。流下能力を上げるために相当、河道掘削しないとイケない。しかし、環境は良いですが、その辺りの考え方、あるいは今後の課題で良いですが、さらっと言うところではないと思いました。</p>
<p>【小池委員長】</p>	<p>どうもありがとうございます。多摩川でいろいろと議論して、多摩川でできる対策はそれなりに考えてきたということも踏まえて、利根川の場合にどんなことが考えられるのか、今後考えていかないといけないのかという記述ということだと思いますが、課長、いかがでしょうか。</p>

発言者	内容
【事務局】	<p>ありがとうございます。今回、極限までというところであれなんですけれども、河道の流下能力を向上させるための断面を最大限、洪水上活用してしまっているということで、土砂の観点もそうですし、生態系の観点もそうだと思いますが、本来、川が持っている余裕というか、環境上必要な土砂の流し場だとか、環境の場みたいなものを若干いじめているところが出てきてしまっているのかなと思います。我々、河川管理をする上でも一定のそういう幅も必要だと思いますし、当然環境上のことを考えたときに、代償措置をどういうふうに全体で考えるのかみたいなこともしっかり考えていきながら、断面のつくり方、それから連続した環境の整備の在り方、この辺は今、どこまで管理のことまで考えてできていると言われると、まだ先へといろいろ考えていけないといけないところかなと思いますので、ぜひ現場での実施も含めながら、しっかり対応していきたいと思います。表現ぶりはまた考えるところもありますが、現場での対応もしっかり考えていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。</p>
【小池委員長】	<p>どうもありがとうございます。委員の皆様からほかに何かございませんでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、本日の議論には関係都県の方々に参加いただいておりますので、順に御意見を賜ればと思います。まず、茨城県様、よろしくお願いいたします。</p>
【大井川委員代理 (矢内)】	<p>茨城県河川課長の矢内でございます。利根川水系の河川整備方針の変更について、委員の皆様には熱心な御審議を賜りましてお礼申し上げます。また、日頃より本県の河川行政に対しまして深い御理解と多大な御支援をいただいておりますこと、この場をおかりしまして重ねてお礼を申し上げます。本県といたしましては、利根川水系の河川整備基本方針の変更につきまして、特に異議はございません。今後、河川整備基本方針、そして河川整備計画の変更の後、整備を行っていただく際には、本県や流域市町村などと十分な調整を行っていただきながら、早期に流域住民の安全安心が確保されるよう進めていただければと考えております。気候変動に伴う災害が激甚化・頻発化する中、本県といたしましても流域の治水安全度向上につながるよう、引き続き国や流域市町村と協力して、ハード、それからソフト対策が一体となった流域治水にしっかりと取り組んでまいりますので、今後とも御支援、御協力をよろしくお願い申し上げます。以上でございます。</p>
【小池委員長】	<p>ありがとうございました。それでは栃木県様、よろしくお願いいたします。</p>
【福田委員代理（細井）】	<p>栃木県知事の代理で出席をさせていただきます県の河川課長の細井でございます。日頃から大変お世話になっております。本県では平成27年の関東・東北豪雨、それから令和元年東日本台風と、度重なる甚大な被害を受けておりまして、気候変動による水災害の頻発・</p>

発言者	内容
	<p>激甚化を強く感じているところでございます。今回の基本方針の変更案につきましては、気候変動を踏まえた降雨量や流出量の増加、また最新の利水技術や環境創造に関する知見が反映されていくものと考えておりました。将来にわたりまして県民の安全安心に寄与するものと考えております。今後、本方針に即した河川整備計画の変更において、具体的な整備内容が議論されるものと思われませんが、本県といたしましても国交省様と連携しながら、利根川水系全体の治水安全度の向上、もしくは利水環境の向上に努めてまいりたいと考えております。引き続き、御支援、御協力よろしくお願ひしたいと思ひます。以上でございます。</p>
【小池委員長】	<p>どうもありがとうございました。次に、群馬県様、お願ひいたします。</p>
【山本委員代理（後藤）】	<p>群馬県県土整備部技監の後藤と申します。よろしくお願ひします。群馬県におきましては、前回の小委員会でも発言をさせていただきましてありがとうございます。群馬県の思いを酌み取っていただきまして、本文案の中でも反映していただいていること、この場をお借りしてお礼申し上げたいと思ひます。群馬県では、令和元年東日本台風の際に、県内観測史上最大となる雨量を記録しております。頻発化・激甚化する気象災害にしっかりと対応できるように、群馬県では災害レジリエンスNo.1 というものを目標に掲げまして、防災・減災対策に取り組ませていただいているところであります。こういった中、利根川水系が県土の約99%を占めているという状況が群馬県としてありまして、群馬県内で安心して暮らせるようになるためには、どうしても利根川水系の治水安全度の向上というものは必要不可欠だと思ひます。こういった中で、今後、国の方で定めていただきます河川整備計画の見直しにおきましては、関係都県や地域の意見をしっかりと聞いていただいた上で、治水安全度の向上に向けまして、迅速に河川整備を進めていただきたいと思ひます。特に第135回小委員会の中で申し上げたとおり、ダム of 整備や改築につきましては地元住民への負担が非常に大きいため、計画策定に際しましては地元の理解を得てから進めていただくとともに、工事実施に当たりましては、地域振興などの地元対策につきましても積極的な国の支援をお願ひしたいということでありまして。群馬県からの意見は以上になります。</p>
【小池委員長】	<p>どうもありがとうございました。次に、埼玉県様、お願ひいたします。</p>

発言者	内容
【大野委員代理（大原）】	<p>埼玉県県土整備部河川砂防課の大原と申します。本日は知事代理として出席させていただいております。どうぞよろしくお願いたします。埼玉県にかかる利根川水系におきましては、令和元年東日本台風の際に、利根川中流部の川俣水位観測所で計画高水位を約4時間にわたり超過するなど、大規模な出水となりました。また、昨年6月の大雨では、中川の中流域において、4,000件を超える甚大な内水被害が発生しております。このように頻発化・激甚化する水災害の状況を鑑みますと、今回、利根川水系河川整備基本方針について熱心に御審議いただき、見直しをしていただくことに対しましては、心から感謝を申し上げるところでございます。まず、御提案いただきました河川整備基本方針の変更案につきまして、埼玉県として特に異議はございません。その上で何点かお願いを申し上げまして、意見に代えさせていただきたいと思っております。今回の基本方針の変更案では、気候変動の影響を考慮し、将来予測される降雨量に対する河道への流量配分や、洪水調節施設などによる調節流量をお示しいただいております。利根川、江戸川では、令和元年東日本台風においても、八ッ場ダムをはじめとする利根川上流のダム群や渡良瀬遊水地などで洪水調節機能が最大限発揮されたことや、現在も進められている首都圏氾濫区域堤防強化対策の効果が発現したことにより、堤防が決壊せず、流域での甚大な被害が回避されてきたと認識しております。今回の基本方針の変更に伴う具体的な方策につきましても、今後、河川整備計画の中で議論されるものと思っておりますが、国において検討いただく方策について、本県にも十分な情報共有をお願いしたいと考えているところでございます。また、中川においても、これまで全国に先駆けて総合治水対策に取り組み、本年3月には特定都市河川に指定していただいたことも踏まえ、国土交通省、東京都、茨城県や関係市町等とさらに密に連携し、流域治水の取組を進めていきたいと考えております。今後とも国土交通省をはじめ、利根川流域の関係都県や関係市町と連携・協力し、河川整備をはじめとする流域治水の取組を着実に推進していきたいと考えております。御支援、御協力のほどよろしくお願いいたします。埼玉県といたしましては以上でございます。本日はありがとうございました。</p>
【小池委員長】	<p>どうもありがとうございました。それでは東京都様、よろしくお願いいたします。</p>
【小池委員代理（渡辺）】	<p>東京都建設局河川部計画課長の渡辺と申します。本来、知事が臨時委員になっておりますが、代理として発言をさせていただきます。東京都は、利根川流域におきまして、江戸川や中川、綾瀬川など9つの河川を管理してございます。都としましては、首都を水害から守るた</p>

発言者	内容
	<p>めにも、これら支川の整備を国と連携して着実に進め、利根川水系全体の治水安全性の向上に努めてまいりたいと考えてございます。それでは、今回の方針変更に関しまして、2点、意見を申し上げさせていただければと思います。1点目でございますが、都が管理している支川への大きな影響はないという御説明をいただいておりますので、変更自体に特に意見はございませんが、今後、方針の変更を受けて検討されます河川整備計画の変更に向けましては、流域自治体との連携を引き続き図られますよう、お願いしたいと思います。2点目でございます。冒頭、小池委員長からも御意見がございましたが、気候変動は治水のみならず、厳しい渇水の発生など利水への影響も懸念されます。都の水道水源の約8割は利根川、荒川水系でございます。利根川上流ダム群は首都・東京の安定給水に不可欠な施設であるため、既存ダムの活用などを検討するに当たりましては、利水者を含む関係者間での十分な調整をお願いしたいと思います。東京都からの発言は以上でございます。</p>
<p>【小池委員長】</p>	<p>どうもありがとうございました。すみません、千葉県様を飛ばしておりまして大変申し訳ありません。私のミスで。千葉県様、お願いいたします。</p>
<p>【熊谷委員代理（古谷野）】</p>	<p>千葉県でございます。熊谷知事の代理として出席させていただいております千葉県河川整備課長の古谷野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。委員の皆様におかれましては、昨年12月からこの委員会の中で御審議いただきましてありがとうございます。本県では、令和元年東日本台風や令和5年9月の台風第13号の接近に伴いまして、総雨量400ミリを超える記録的な降雨がございました。これまで実施してきた治水対策によりまして、浸水被害の軽減に一定の効果をもたらしたものと考えておりますが、県の管理河川におきまして越水等の被害が多数発生しております。このような状況を考えますと、地球温暖化の進行がもたらす気候変動も要因と感じておりまして、今回示されました基本方針変更案は、今後の水害リスクの増大に備える非常に重要なものと考えておりまして、本県としましてはその方針に異議はございません。その上で、利根川の最下流圏に位置します千葉県としまして御意見を申し上げますと、江戸川の左岸につきましては、本県において特に人口、資産が集中した地域であり、また利根川の下流域は、令和元年東日本台風により住宅の浸水被害が発生しております。今後、河川整備計画の変更に向けて検討される際におきましては、地域の意見を聞きながら、上下流、左右岸のバランスに御配慮いただきまして、早期に治水安全度の向上が図られるようお願い申し上げます。今後とも流域治水の推進に向けまして、国土交通省さ</p>

発言者	内容
	<p>んや関係の市町村長と連携して取り組んでいきたいと考えておりますので、御支援、御協力のほどお願い申し上げます。千葉県からは以上でございます。</p>
<p>【小池委員長】</p>	<p>千葉県様、大変失礼いたしました。申し訳ございませんでした。どうもありがとうございました。今、御参加いただいております都県の代表の皆様から、今日まで議論し、取りまとめてまいりました基本方針の変更案につきましては、皆様より御支持をいただきました。一方で、今日、委員の皆様から非常に重要な御指摘もいただいております。1つは、土砂と環境というものを改めてどういうふうにかとということ、それから環境面につきましては、環境の対策とその効果、それからそれを見える化していく工夫ということも、いろいろな側面で御指摘をいただいております。もう一つ、先ほど群馬県様からもちょっと触れていただき、東京都様からも触れていただきましたが、上流の水源地、あるいは水をためる、もちろん利根川の場合には渡良瀬であるとか、下流の3池というものがございしますが、上流ダム群も非常に大きな役割を担っていただいております。清水委員からもお話がありましたが、上流水源地あるいは上流貯留地域と、その受益地である下流との間でどういうふうに関連を進めていくかということも重要な課題であると思います。今日参加いただいている都県の皆様からも、その重要性は御指摘いただいております。本文案につきましても基本的な御了解はいただいているとは思いますが、いくつか重要な御指摘、それから内容を改めて確認したほうがよいというふうにも思いますので、次回の小委員会におきましては、特に本日の御意見を踏まえて、本文案の精査を改めてさせていただくということで、本文案のブラッシュアップに努めていければと思います。また、今日御指摘いただいた中で、いくつか資料も準備して御説明すべきこともございますので、事務局におかれてはその資料の御準備をお願いしたいと思います。そういうふうを考えますが、よろしいでしょうか。（「異議なし」の声あり）</p>
<p>【小池委員長】</p>	<p>御異議がないように思いますので、それでは本日の会議はここまでとしたいと思います。各委員には大変熱心に御議論いただき、また本当に貴重な御意見をいただきまして、私自身気づいていないところも教えていただきました。どうもありがとうございました。都県の皆様からも大変前向きな御示唆もいただきまして、ありがとうございました。本日の議事録につきましては、内容を御確認いただいた後、国土交通省ウェブサイトにて一般公開することといたします。本日の議題は以上でございます。</p>

発言者	内容
【事務局】	委員の皆様におかれましては、長時間の御議論ありがとうございました。それでは、閉会とさせていただきます。ありがとうございました。